

ゴモラには誰がいるのか？

——フランス語フランス文学における女性同性愛の表象②——

長澤法幸

はじめに

マルセル・プルースト（1871-1922）の長編小説『失われた時を求めて *A la recherche du temps perdu*』の『ソドムとゴモラ *Sodome et Gomorrhe*』には、数多くの同性愛者が登場するが、そのうち、女性の同性愛については常に「ゴモラ *Gomorrhe*」と関連付けられている。

アルベルチヌが私に吹き込む、このつらく永遠に続く猜疑心、いわんや、この猜疑心がまとうであろう特殊な性癖、とりわけゴモラ的な (*gomorrhéen*) 性格がすでに始まっていたというならば、それは嘘になると私は思う⁽¹⁾。

ここでいう「ゴモラ的な性格 *le caractère [...] gomorrhéen*」とは、サフィズムのことを指している。オンライン版でも利用できる『仏語宝典 *Trésor de la Langue Française (informatisé)*』をはじめとする現行の仏語辞典で、*gomorrhéen* の項を調べると、「女性の同性愛の *homosexualité féminine*」という簡潔な説明があり、例文としてプルーストの一節が引かれている。プルーストが作中で同性愛者について記述する際に用いる語は、他に、男女兼用の「ホモセクシュアル *homosexuel*」や、否定的な主観を含む「倒錯者 *inverti*」などがあるが、女性について、特に十九世紀まで広く使われた「トリバード *tribade*」や、ボードレールに由来し、すでにデルポー（*Alfred Delvau, 1825-1867*）『現代好色用語辞典 *Dictionnaire érotique moderne*』（1864年）には項目として挙げられている「レズビアン *lesbienne*」を用いてはいないところが特徴的な点であるといえる。他には、女性同性愛的な概念や行為として「サフィズム *saphisme*」という語は使われているが（p. 235, 500）、その語源となった古代詩人サッフォーについては、単に岬から身を投げて入水自殺した女としてしか描かれてはいない（p. 197）。

また、プルーストが特にソドムを男性、ゴモラを女性と結びつける着想を得たのは、エピグラフに掲げ、本文中にも引用しているヴィニーの詩からである。その部分を含む一説を引用しよう。

La Femme est à présent pire que dans ces temps

《女》は今やこの世で最悪のものだ

Où voyant les Humains Dieu dit : Je me repens !
Bientôt, se retirant dans un hideux royaume,
La Femme aura Gomorrhe et l'Homme aura Sodôme.①
Et, se jetant, de loin, un regard irrité,
Les deux sexes mourront chacun de son côté.②

《人類》を見遣り、《神》が言う「私は悔やむ！
じきに、私はこの醜悪な王国から退こう
女はゴモラを持ち、男はソドムを持たん」①
そして身を投げ、遠くから、眼差を苛立たせて
二つの性は互いの彼岸で死ぬのだ。」②

これは詩集『宿命 *Les Destinées*』（1864年）に収録された「サムソンの怒り « *La colère de Samson* »」という詩の一部である。怪力で知られるサムソンが妻であるデリラの裏切りによって力を失うという旧約聖書『士師記』の挿話を基にした詩であるが、引用のうち、下線①がブルーストがエピグラフとして冒頭に挙げた行であり、②が本文中に引用した部分である（p. 17）。この詩は、初期ヴィニーに多く見られる「不実な女」を主題とした詩で、注釈によると、登場するデリラは女優のマリー・ドルヴァルを意識して造形されている⁽³⁾。この詩では、引用の下線②に端的に表されているように、スताल夫人以来のロマン主義の典型的な主題である男女二元論的対立が主要な題材となっているが⁽⁴⁾、同性愛は主題として掲げられてはいない。それゆえ、「ゴモラ」を「男性」ではなく「女性」とことさらに結びつけたのがヴィニーだとすると、「ゴモラ」を「女性同性愛」と決定付けたのはブルーストである、ということはあるだろう。

本稿においては、上記の結論からそれほど遠い解釈をしようという意図はない。しかしながら、過去の用例や辞書を調べてみると、「ゴモラ」という語のヨーロッパ人における理解はそれほど一様ではないことがわかる。本稿では、旧約聖書におけるソドムとゴモラの位置を確認しつつ、それに由来する語の意味の変遷をとらえてゆきたい。

「ゴモラ」とは

二十世紀以前の多くの辞書において、形容詞 *gomorrhéen* が独立した項目として挙げられていることは少ない。また、その名詞にあたる *Gomorrhe* にしても、多くは「ソドムとゴモラ」からの連想として、旧約聖書の世界においてパレスチナにあった都市、というような簡素な説明があるに過ぎない。一方で、ソドム *Sodome* にかんしては、まず、都市の名前としての *Sodome* の他に、その都市で蔓延していた悪徳行為としてのソドミー *sodomie*、およびその動詞形である *sodomiser*、その行為に関与、加担する事物や人にかかわる *sodomiste*, *sodomite*, *sodomique* など、派生語の豊かさからもわかるようにより人口に膾炙した言葉として扱われていたようである。そのため、*Gomorrhe* および *gomorrhéen* の意味を検討するにあたっては、まず対となるソドムの語を検討するのがよいと思われる。

では、まず旧約聖書におけるソドムの挿話を確認しておきたい。ソドムとは悪徳がはびこり、

ヤハウエの神がそのために滅ぼそうとする街の名である。しかし、「神は邪悪な者と敬虔な者を一様に滅ぼしてしまうのか。敬虔な者が五十人いるかもしれないのに」というアブラハムの進言によってヤハウエは一時断念し、視察のための使いをソドムに送ることにする（十八章）。アブラハムの進言の根拠である「五十人」は、十八章の対話を通して四十人、三十人と減り続け、最後は「十人しかいないかもしれない」とまで妥協されるが、結局は一人もおらず、ソドムはゴモラと共に硫黄の火に飲まれて滅んでしまう。その当該の箇所は『創世記』十九章であるが、滅ぼされた街人の悪辣さを象徴的にあらわす場面を以下に引用しよう。

彼ら〔＝ヤハウエの使いである二人の天使とロト〕が横になる前に、町の男たち―ソドムの男たち―が、若者から老人まで町中こぞって、彼の家のまわりを取り囲んだ。彼らはロトに向かって叫び、彼に言った、「今晚、お前のところにやって来た男たちはどこだ。彼らを前に出せ。彼らを知りたいものだ⁽⁵⁾」。

上記の引用の最後の一文にある「知りたい」とは、「性交渉をしたい」という意味であり、『ATD 聖書注解 *Das Alte Testament Deutsch*』は街人のこの発言を根拠に、使いである天使の美貌が悪い欲望を刺激せずにはいられなかった、と解釈している⁽⁶⁾。ここで使われている「知る」という動詞が性交の意味で使われている根拠の一つに、同じく『創世記』四章の有名な一節「そしてアダムはイヴを知った。イヴは妊娠し、カインを産んだ」における「知る」と同じ動詞が使われていることがあげられる。『創世記』十九章、およびその前半と内容的に酷似している『士師記』十九章、そして先の『創世記』四章で書かれている「知る」は、いずれもヘブル語では יָדָע (yāda') および、これと法、人称、時制を異にする同一の動詞である⁽⁷⁾。この語は、単に知識としてだけでなく、体験、経験を通した認知をも意味することから、性行為を婉曲的に表現するのにも適しているという⁽⁸⁾。

以上を踏まえると、ソドムにおける悪徳が男性間の性交渉を指すことは自明のように思えてしまいが、実際はそうではなかった。ソドムにおける悪徳は、旧約聖書に限っても『イザヤ書』においては司法の腐敗、『エゼキエル書』では謙虚のなさや飽食、『エレミヤ書』にあっては姦通、虚偽など、様々な解釈がなされていた⁽⁹⁾。また、キリスト教がローマ社会に広まりつつあった最初期には同性愛は問題とされていなかったが、キリスト教が普及し、よりストイックな教義が生み出されてゆくうちに、同性愛も否定の対象となっていったのである⁽¹⁰⁾。その先駆的な著作が、アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354- 430) の『告白 *Confessiones*』(397年)である。彼は同書の中で「ソドム」の語を用いつつ、以下のように批判を展開する。

それゆえ自然に反する切望は、場所と時とを問わず唾棄され罰されなければならない、ちょうどソドムの人々のように。もしすべての種族がそれをしたとしても、罪の咎めを神の法によって持つことになる、なぜなら神の法はけしてそのような行いをさせるために人類を創ったのではないのだから。神

がその創造者であるところの自然が倒錯した欲望によって汚されれば、当然、神と我々にあるべき共同性それ自体が害される⁽¹¹⁾。

ここでは、「自然に反する *contra naturam*」という表現が用いられているが、ジョン・ボズウェルの解説によると、アウグスティヌスにとっての「自然 *natura*」とは、理想的概念ではなく個人や事物の「本性」のことを指している⁽¹²⁾。では、「本性に反する」とは具体的にどういうことを指し、どのような罪を問われているのであろうか。この問いに簡潔な回答を提供するのが、トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, 1225-1274) の『神学大全 *Summa theologiae*』である。同書の間 154、十二項「自然に反する悪徳は数ある淫蕩の中で最も大きな罪か」の最後を引用しよう。

第四に、罪の重さは、善い行いをしないことよりも、むしろどのような悪をなしたかに依る。自然に反する悪徳の中では、一人でなされる罪 (自慰) が罪の程度が最も低く占められる。その行為は他人と関わらないからである。最も重いのは獣姦の罪で、それは適切な種を相手としていないからである。〔中略〕その次がソドムの罪であるが、それは適切な性を相手としていないからである。その次が、適した性交のあり方に依らない罪だが、他の不適切な性交のあり方よりも、器が適切でないならば、一層罪が重い⁽¹³⁾。

ここで、不適切な性交の罪の重さに明確な序列がつけられているが、注目すべきは以下の二点である。一点は、ここで言われている「ソドムの罪」の意味が、現行のそれよりもかなり限定的な点である。現代語の「ソドミー」は、上でも述べられている「獣姦 *peccatum bestialitatis*」をも意味する語であるが⁽¹⁴⁾、ここでは「適切な性を相手にしていない *non servatur debitus sexus*」と、同性間の問題に限定されているのである。第二点は、引用の最終行にあるように、性別の問題ではなく使用する性器が問題となっている点である。「器 *vas*」はもともと壺などの器の他に、道具全般を指す言葉であるが、ここでは異物を挿入される対象としての肛門を指している。よって、トマス・アクィナスの中で「ソドム」に関わる問題は、あくまでも性交相手の性別なのであって、そのほかのことは必ずしも問題にはなっていないのである。

しかしながら、公的な辞書が *sodomie* の語義をあまり具体的に記述してこなかったこともあり、性別の問題が徐々に性的器官の問題と混同されてきたという事実がある。アカデミー・フランセーズの辞書における *sodomie* の語の初出は第三版 (1740 年) で、そこでは「自然に反する罪 *Péché contre nature*.」としか書かれておらず、具体的な内容を欠く姿勢は最新の第九版 (1992-) に至るまで一貫している。言語の神聖を追求し、卑語の説明を極力排する、やや潔癖な感のあるリトレの辞書も同様で、ほぼ同じ簡潔な説明があるに過ぎない。その中で、『十九世紀ラールス』に比較的詳しい記述がある。その一部を引用しよう。

ソドミー：男性あるいは女性の、自然に反する性交。ギリシア人はこの悪徳を「^{ベデラスティ}少年愛」と名付け、

現代の作家もこの語を最もよく使っている⁽¹⁵⁾。

『十九世紀ラールス』においては、ソドミーはもはや同性の問題ではなく、男女両方に関わりうることでありと明記されている。*Sodomie* の項は第十四巻に収録されており、これが出版されたのは1875年である⁽¹⁶⁾。しかし、こうした記述の先鞭をつけたのはこの事典ではない。これに先立ち、1864年に出版されたデルポーの『現代好色用語辞典』における記述は、さらにわかりやすい。

ソドミー、ソドミゼ：女性か、あるいは男性に *enculer* すること⁽¹⁷⁾。

また、同書では *enculer* についても詳しい説明があり、

Enculer：ソドミストならば、女性の肛門に性器をあてがうこと。^{ペデラスト}少年愛者であれば、男性の肛門に性器をあてがうこと⁽¹⁸⁾。

と記述されている。デルポーの事典においては、「ソドミスト *sodomite*」はもはや男性間の性交すらも問題の埒外にあり、偏に男性性器をどこに受けるかだけが定義のかなめとなっている。以上で見てきたように、「ソドム」、「ソドミー」の語が喚起する意味は、時代を経るにつれて一様ではないことがわかる。このことは、辞書に項目がない「ゴモラ」の語にあってはなおさらのことである。次章では、「ゴモラ」の語が、これまでに確認してきた「ソドム」の意味とほぼ同値であることを前提として、文学作品における記述を取り上げつつ、確認してゆきたい。

3. 文学テキストにおけるゴモラ

では、これまでの議論を踏まえて、文学テキストにおける *Gomorrhée*、*gomorrhéen* の語義の変遷を検討してみたい。まず、フランス語における初出を見てみよう。

Et jamais lon n'a veu terre tant vitieuse	そして、決してこれほど邪悪な地は見られない
(<i>Tesmoin celuy qui vit le feu Gomorrien</i>)	(と、 <u>ゴモラ</u> の火を見た者は言ったが)
Qui n'ait bien enduré quelque ame vertueuse ⁽¹⁹⁾ .	正しい魂を耐えることができぬような。

これは十六世紀の詩人フランソワ・ペラン (François Perrin, 1533-1606) の詩集『人生の肖像 *Le pourtraict de la vie humaine*』(1574年)の第五十五歌の一節である。前述の『仏語宝典』によると現在の *gomorrhéen* にあたる語の初出はこれであり、*Gomorrien* と綴りが若干異なっている。意味

も「ゴモラの、ゴモラに関わる *de Gomorrhe*」という記述があるにすぎず、同性愛や悪徳といった具体的な意味を備えているとはいえない。それどころか、上記の引用においては「ゴモラの火 *le feu Gomorrien*」というように使われており、これは、先に見たように『旧約聖書』十九章においてソドムと同時にゴモラを滅ぼした炎のことを指している。すなわち、ここでいう「ゴモラに関わる」とは、「ゴモラを覆う」や「ゴモラを滅ぼす」というように換言できるものであり、ゴモラという都市の外部から、内部に影響を与える存在を修飾する語として使われているのである。「ゴモラに属する」を意味する現行の語の出発点が実は大きく異なることは押さえておくべきであろう。

一方で、「ソドム *Sodome*」から派生する語が不品行を表すのと同様に、反宗教の意味を持つゴモラ由来の用法も当然存在する。マルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』から一節引用しよう。

コルデッリはひとりの老婆に少年を連れてこさせ、私は彼の指示に従って少年のゴモラの孔 (*l'orifice gomorrhéen*) を湿らせ、男根をそこに導きました。デュランは下から美少年を吸い、このイタリア人は挿入しながら、私のお尻に接吻しました。常にしなやかに、お手の物として、快樂だけを摘み取り、けてそれを逃さず、うっかり漏らしてしまわないように、彼はお尻からものを引き抜いたのです⁽²⁰⁾。

この文脈では「(生物の) 穴 *orifice*」を修飾する、ある種解剖学的な用法で使われているが、これは、数行先で「尻 *cul*」と言い換えられていることからわかるように、肛門のことを指している。これは男性による少年への性的虐待行為ともいえるもので、女性同性愛の問題でないことは明らかである。また、好色用語発明家としての顔ももつサドは、これを基にした動詞をも作中で用いている。

そう言うと、この好色漢は私を寝台に押し倒し、私のお尻に挿れながらクレールヴィルのお尻を弄っていました。ものを乱暴に入れたり出したりしたのち、趣向を変えて、私の後ろを吟味したり接吻したりしながら、次に彼がゴモリゼ (*gomorrhise*) したのは、私の友達でした⁽²¹⁾。

プレイヤー版の注釈によると *gomorrhiser* とはサドによる造語で、*sodomiser* と同じ意味で使われている⁽²²⁾。綴りについては不統一であり、*m, r* がそれぞれ一つのもので二つのものが混在している。先の引用からもわかるように、サドの作品の登場人物の、性的対象としての臀部や肛門への執着は常軌を逸したものが多く、この語の創作、使用はそうした嗜好の表れであるといえるが、同時に、同じ語を繰り返し使うことを避けるフランス語圏の作家に共通する傾向によるものも大きい。この動詞は、同じ文で使われている、語根に「尻 *cul*」を含む *enculer* の言い換えともいえるのである。この語はサドの創作であり、他ではほとんど見られないが、ミュッセのポルノグラフィ『ガミアニ *Gamiani ou Deux nuits d'excès*』(1833年)に使用例が見いだせる。

この悪魔のような着想を有効に使うため、私は一番の強蔵に仰向けに寝てもらって、彼の荒くれのお道具に跨って心行くまで楽しんでいる間、私はすかさず二番目の男にゴモリゼ (gomorrhisée) された。私は口で三人目の男を捕らえて、それがあまりに気持ち良かったから、彼は悪魔めいて暴れまわり、最も情熱的な叫びをあげたのだった⁽²³⁾。

これは物語の終盤、主人公のガミアニ夫人が壮絶な乱交の記憶を語る場面であるが、同性愛傾向のあるガミアニ夫人が異性間での肛門性交を行っている点が重要であるといえる。これは、デルボーの事典がすでに記述しているように、ソドミーが必ずしも同性愛のみを表すものではないこと、ソドムが男性、ゴモラが女性という区別がなかったことをはっきり示している。

一方で、大デュマ (Alexandre Dumas père, 1802-70) の五幕劇『カリギュラ *Caligula*』(1838年)の前書きでは、性的な放縦というよりは、むしろ奢侈の罪の象徴としてゴモラの語が扱われている。

また、人、金、科学の中央集中化、おかしな風俗の結果として、不分別な贅沢、ゴモラの腐敗 (une corruption gomorrhienne) がある。ローマという巨像は、うわべは非常に盤石だが、しばしば突然の動乱、地底の衝撃、不可思議な震動を被る⁽²⁴⁾。

このように、「ソドム」由来の語以上に、「ゴモラ」の語義は一様な理解の上に成り立っていないことがわかる。しかし、ブルースト以前に「ゴモラ」と女性同性愛を結び付けた文人は絶無ではない。その数少ない例が、「1900年のサッフオー」こと、世紀末の女流詩人ルネ・ヴィヴィアンである。

Ashtaroth, Belzébuth, Moloch et Bélial
Sur les ventres gonflés tracent le nombre : treize.

アスタロト、ベルゼブル、モロク、ベリアルは
孕める胎に「十三」の数字をなぞる。

Car Bélial, Moloch, Belzébuth, Ashtaroth
Font surgir, sous les yeux scandalisés de Loth,
Les marbres de Sodome et les fleurs de Gomorrhe,
Et, mariant l'amante à la vierge, Ashtaroth
Ressuscite les nuits qui font haïr l'aurore.

ベリアル、モロク、ベルゼブル、アスタロトが
ロトの憤った目の下に
ソドムの大理石、ゴモラの花を生じさせ
焦がれる女を乙女に娶らせる、アスタロトは
夜を蘇らせ、朝日を憎ませるのだから。

Car Bélial, Moloch, Belzébuth, Ashtaroth
Font triompher Sodome et claironner Gomorrhe⁽²⁵⁾.

ベリアル、モロク、ベルゼブル、アスタロトが
ソドムを克たせ、ゴモラに凱歌を歌わせるから。

この詩は 1903 年末に出版された『衆瞽のヴィーナス *La Vénus des Aveugles*』に収録された「十三
« Treize »」という詩の最後の部分である。異性愛、婚姻、妊娠を醜いものとして否定し、女性の
同性愛を称揚するという点では、ルネ・ヴィヴィアンが処女詩集の段階から詩に歌っていた典型
的な題材であり、そこまでの意外性はない。しかしながら、1903 年は詩集『喚起 *Évocations*』や、
翻案詩集『サッフォー *Sapho, Traduction nouvelle avec le texte grec*』の出版によって、古代ギリシ
アの世界に倣った同性愛賛美を歌い続けていた年であり、悪魔のテーマを前面に押し出したこの
詩は詩人にとって新しい世界観を切り開いたものの一つだといえるだろう。引用を見て明らか
のように、硫黄の雨によって滅ぼされたソドムの街の唯一の生き残りであるロトの鬚鬢の眼をもの
ともせず、アスタロトが「焦がれる女を乙女に娶らせる *mariant l'amante à la vierge*」。この詩に
は、これまでのソドムとゴモラ由来の語に見られるような具体的な猥褻性はなく、むしろ「大理
石 *marbres*」や「花 *fleurs*」といった美しいもののイメージと結びつけられている。旧約聖書にお
ける頹廢と嫌悪の街が、審美的な象徴として扱われているのは、同性愛に対する嘲弄的態度、あ
るいは窃視的興味を持たない、当事者としてのルネ・ヴィヴィアンの姿勢が表れているといえる
だろう。

(続く)

注

- (1) Je crois que je mentirais en disant que commença déjà la douloureuse et perpétuelle méfiance que devait m'inspirer Albertine, à plus forte raison le caractère particulier, surtout **gomorrhéen**, que devait revêtir cette méfiance. (Proust, *Sodome et Gomorrhe dans A la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1988, p. 183.)
- (2) Vigny, « La colère de Samson » dans *Les Destinées dans Œuvres complètes*, Tome I, texte présenté, établi et annoté par François Germain et André Jarry, Gallimard ; « Bibliothèque de la Pléiade », 1986, p. 141.
- (3) *Ibid.*, p. 1085.
- (4) *Ibid.*, p. 1087.
- (5) 『旧約聖書 I 創世記』、月本昭男訳、岩波書店、1997 年、五十三、四頁。
- (6) Gerhard von Rad, *Das erste Buch Mose Genesis*, 8 Auflage, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1967, p. 185.
邦訳は『ATD 旧約聖書註解』、山我哲夫訳、ATD・NTD 聖書註解刊行会、1993 年。
- (7) 『旧約聖書神学辞典』(東京神学大学神学会、1983 年)においては、これらを同一の語として分類していないようである。
- (8) *Ibid.*, pp. 83,4.
- (9) *Ibidem*.
- (10) 海野弘 『ホモセクシャルの世界史』、文藝春秋、2008 年、八十一頁。
- (11) *Itaque flagitia, quae sunt **contra naturam**, ubique ac semper detestanda atque punienda sunt, qualia*

- Sodomitarum** fuerunt. Quae si omnes gentes facerent, eodem criminis reatu diuina lege tenerentur, quae non sic fecit homines, ut se illo uterentur modo. Violatur quippe ipsa societas, quae cum deo nobis esse debet, cum eadem natura, cuius ille auctor est, libidinis peruersitate polluitur. (Augustine, *Confessions, Volume 1: Introduction and Text*, commentary by James J. Odonnell, Oxford University Press, 2013, p. 29.)
- (12) ジョン・ボズウェル『キリスト教と同性愛 —1～14世紀西欧のゲイ・ピープル』、大越愛子、下田立行訳、国文社、1990年、一六三頁。
- (13) Ad quantum dicendum quod gravitas in peccato magis attenditur ex abusu alicujus rei quam ex omissione debiti usus. Et ideo inter vitia quae sunt **contra naturam**, infimum locum tenet peccatum immunditiae, quod consistit in sola omissione concubitus ad alterum. Gravissimum autem est peccatum bestialitatis, quia non servatur debita species. [...] Post hoc autem est vitium **sodomiticum**, cum ibi non servatur debitus sexus. Post hoc autem est peccatum ex eo quod non servatur debitus modus concumbendi, magis autem si non sit debitum vas quam si sit inordinatio secundum aliqua alia pertinentia ad modum concubitus. (St Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, tome 43, Latin text and English translation, Introduction, Notes, Appendices and Glossaires, edited by Thomas Gilby and T. C. O'Brien, Blackfriars edition, 1964, p. 248.)
- (14) 事実、現代ドイツ語の sodomie は第一義的に獣姦を意味する。
- (15) Sodomie: Coït contre nature, d'un homme ou avec une femme [...] Les Grecs donnaient à ce vice le nom de pédérastie, qui est aussi le plus usité chez les auteurs modernes. (Lalousse, *Grand dictionnaire universel du XIX siècle*, Tome 14, p. 811.)
- (16) 第一巻が出版されたのは 1866 年。
- (17) SODOMIE, SODOMISER: Enculer une femme-ou un homme. (Delvau, *Dictionnaire érotique moderne*, Union Générale d'Édition, 1997, p. 450.)
- (18) ENCULER : Introduire son membre dans le cul d'une femme, lorsque'on est sodomite- ou d'un homme, lorsqu'on est pédéraste. (Ibid., p. 208.)
- (19) François Perrin, *Le pourtraict de la vie humaine*, Guillaume Chaudiere, 1574, p. 62.
- (20) Il fait contenir l'enfant par une vieille, j'humecte, par ses ordres, **l'orifice gomorrhéen**, je guide le membre, Durand suce le ganymède en dessous, et l'Italien encule, en baisant mon derrière. Toujours assez leste... assez maître de lui, pour n'effleurer que le plaisir, sans jamais le laisser échapper, Cordelli, sans perdre de foutre, se retire encore de ce cul. (Sade, *Histoire de Juliette* dans *Œuvres*, édition établie par Michel Delen, avec la collaboration de Jean Deprun, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1998, p. 1143.)
- (21) À ces mots le paillard me renverse sur le lit, et m'encule en maniant les fesses de Clairwil ; au bout de quelques allées et venues assez grossièrement faites, il change de poste, et c'est ma compagne qu'il **gomorrhise**, en examinant et baisant mon derrière.(Sade, *Juliette*, op.cit. pp. 669-70.)
- (22) Ibid., p. 1484.
- (23) Pour la [= une idée diabolique] mettre à profit, je priai le plus fort de se coucher à la renverse, et, tandis que je festoyais à loisir sur sa rude machine, je fus lestement **gomorrhisée** par le second ; ma bouche s'empara du troisième et lui causa un chatouillement si vif, qu'il se démena en vrai démon et poussa les exclamations les plus passionnées. (Musset, *Gamiani suivis de lettre à la présidente de Théophile Gautier*, « Collection Aphrodite classique », Eurédif, 1975, p. 103.)
- (24) Aussi, de cette centralisation d'hommes, d'or et de science, était-il résulté des mœurs étranges, un luxe

insensé, une corruption **gomorrhienne**: le colosse romain, tout-puissant qu'il était en apparence, éprouvait parfois de subites commotions, de souterraines secousses et de mystérieux tremblements. (Dumas, *Caligula, Tragédie en cinq actes et en vers*, Bruxelles, Meline, 1838, p. x.)

(25) Renée Vivien, « Treize » dans *La Vénus des Aveugles* dans *Œuvres poétiques complètes*, Jean-Paul Goujon, Régine Deforge, p. 188.